

相互理解による教育交流への取り組み

前日本メキシコ学院日本コース 校長

埼玉県比企郡鳩山町立鳩山中学校 校長 番 場 修

キーワード：教育改革，教育交流，2学期制導入

1. はじめに

日本メキシコ学院は、メキシコ市内の南部、ウナム自治大学の近くの高級住宅地内にある。日本メキシコ学院日本コースは、1968年5月に50名で発足した「メキシコ日本人学校」である。1974年9月、メキシコ合衆国を訪問された田中首相とエチェベリア大統領との会見時に共同声明において「日本メキシコ学院」の早期開設を支援する旨の発表があり、1977年には永年にわたって学院設立を熱望していたメキシコ進出企業と日系コロニアル社会の人々がメキシコ人にも門戸を開いた学院、「社団法人日本メキシコ学院」を、日本人学校として世界で唯一の国際校として創立した。建学精神には「両国にとって有為な人材育成」を掲げた。

学院は、日本コース、メキシココース、文化センター及び事務局で構成される。日本コースは、小学部、中学部で日本文部科学省の定める学習指導要領に準拠した教育を行い、スペイン語、英語を学習し、メキシコ理解教育を実施している。メキシココースは、幼稚園、小学部、中学部、高校部で構成され、幼稚園、小学部、中学部は、メキシコ文部省（SEP）の管轄下となり、高校部は、ウナム自治大学の管轄下となる。日本語教育部が設置され、幼稚園では、バイカルチュラル教育（二文化教育）が行われ、小学部から高校部までは日本語教育（週5時間）が実施されている。文化センターは、両コースの架け橋的な役割をし、国際交流室、広報室、合同クラブ室が設置され、交流活動が円滑に進んでいる。

2. 学院の教育改革

学院創立30周年を迎え、記念式典、記念行事が昨年、盛大に開催された。この歳月、メキシコ大統領のご息が学び、多くの優秀な人材が育成され、素晴らしい教育が実践されてきた。ここ数年間、メキシココースでは、人事に関わる問題が常に起き、かつ児童・生徒数が減少する事態となり、学力向上と日本文化の教育の充実が大きな課題となった。特に幼稚園は、メキシコ人園長により日本文化にふれる授業ができにくい状況で、他のメキシコの幼稚園と同じ教育となり、魅力のない幼稚園となった。教員の雇用関係については、幼稚園、小学部では常勤教師が多いが、中学部、高校部の教員は非常勤が殆どで、学院に対する所属感や教育の情熱があまり見られなく、教育活動が停滞している現状であった。これを解決するためには、両コース教師の教育交流を積極的にする必要があり、このことが特色ある日本人学校づくりと考えた。

(1) 学院教育研究会の発足

以前は、両コースの教員間の交流は、国際交流室が調整役としてメキシココースの授業参観の時期を設定し、日本コースの教師が希望して参観を行っていた。もっと計画的に両コースの教員が教育交流を深めることで、両コースの教育観や指導法が改善され、学院全体の教育水準の向上と生徒数増加になると考えた。

方策として「学院の教育水準の向上を図るため、メキシココースと日本コースの教育文化の交流活動を行い、両コース教育の相互理解を深め、各部の連携を密にし、かつ教師の指導力、資質の向上を図る研修の機会とする」ことを目的に研究組織づくりを行った。規約がないと一過性で終わってしまう懸念があったので、教頭が規約を作成した。それを校長会（学院長、日本コース校長、事務局長）、部長会（日本コース校長、メキシココース各部長、学院長）において説明し、了解の下に両コース運営委員会、理事会に提案し、承認を得て教育研究会を発足した。

①「日本メキシコ学院教育研究会規則」作成

研究組織，研究課題，研究内容・活動，授業研究・公開授業の計画等

②「学力向上推進委員会細則」作成

*算数・数学小委員会の設置（授業参観，共通計算力テストの実施，学力テスト交換の実施，年間指導計画の交換，教材，教具や指導法の情報交換）

*語学（日本語，英語，スペイン語）小委員会の設置，（相互の授業参観，テーマに応じた研究発表，年間指導計画の交換，情報交換）

*体育委員会（H20から運動会原案作成）



③「学院教育研究発表会規約」作成 年1回発表会

日本コース，メキシココース各々が研究課題の取り組みを発表し，教育活動を理解し，指導法等の改善を図る。

④「教育論文リセオ教育賞（最優秀賞，優秀賞，特別賞）規約」作成

教育論文を募集し，日々の教育実践をまとめ，その努力を顕彰し，教育水準の向上を図る。メキシコには，このような活動がなく，啓発を行っている。

(2) 授業研究及び公開授業の相互参観

日本コースの授業研究の参観について部長会等で説明を行い，開催通知も配布し，より多くの教師に参加するように呼びかけた。メキシココースの公開授業についても日本コースに案内が届くようになり，相互に授業を参観する機会が多くなり，教員間の交流ができる体制となった。しかし勤務時間との関係で研究協議会が開催できず，内容の深まりができない状態だった。授業研究に参観した感想や意見を書いて，翻訳してお互いに交換した。

これらの教育改革には，学院全職員の意識改革が必要で，制度・組織について説明し，理解を得る機会を設定し，啓発することが大切である。そのため，メキシココースの年度初め採用者対象にオリエンテーションを行うことになった。

3. 日本コース学校経営の取り組み

前任者との引継ぎや学校診断等の結果分析（語学教育の不满，授業時数の確保等）を念頭に3ヶ月間ほど教育活動を静観する中で，諸行事に使用する時数の多さに驚き，何かの手立てを考える必要を感じた。

(1) 語学教育の改善（言語教育推進委員会の設置）

前年度の学校診断では，スペイン語の授業に対する保護者の不满が多く書かれたため，改善を図る手立てが必要となった。スペイン語，英語，日本語も含めた言語教育推進委員会を立ち上げて，語学の改善を図る取り組みを次のように行った。

①モジュール方式の採用

9月から小3からモジュール方式で，前半はスペイン語，後半は算数の計算ドリルと漢字練習を行い，基礎学力の定着を図るようにした。モジュールにより授業時間が短くなり，子ども達もスペイン語の授業に飽きることなく，集中した学習ができ，週の回数も増えて，語学学習には有効的である。また，保護者の要望を受けて翌年度から小4からの英語学習は週2時間，45分とモジュール2回の授業となり，学習効果も上がってきた。

②スペイン語，英語のシラバスの配布

スペイン語と英語は，小学部では教育課程外であるため，毎月，学校便りと一緒に目標と学習項目を記載したシラバスで保護者に知らせ，家庭学習の協力を得るようにした。年度末には，1年間のまとめとして検定試験を行う計画を検討し，児童英検を実施した。児童たちは目標ができ，学習に集中するようになった。翌年には小学

部、中学部でも全教科学習シラバスを5月に配布し、家庭学習の協力を得るようにした。また、年間指導計画や評価計画等が今まで作成されていなかったため、教務主任が中心となって取り組み、夏休み中に完成することができた。

③算数のTT指導と少人数指導

算数は個人差が顕著であるため、本コースでは、以前からTT（チーム・ティーチング）指導を行ってきたが、TT指導と少人数指導を併用し、学習課題に応じてTT指導後、2、3時間を使用して少人数指導を積極的に取り組むように働きかけ、取り組むようになった。

(2) 2学期制導入への取り組み

夏休み前、1学期の成績処理に追われる学級担任は、保護者との面談や一時帰国する児童・生徒の通知表を作成しなければならない。この問題をうまく解消できないかと考え、2学期制が得策であると思った。企画会議に2学期制導入の提案と説明を行い、職員会議で2学期制導入検討委員会の設置を告げ、検討していく意向を説明した。運営委員会や理事会にも2学期制導入の趣旨と検討をすることを説明し、賛同を得た。9月より2学期制導入検討委員会を開催し、学力向上と授業時数の確保と諸行事の見直し等を検討し始め、11月の授業参観後には2学期制導入説明会をアウデトリオで開催し、多くの保護者が参加した。趣旨や現状の授業時数の確保が難しい状況と2学期制導入時の授業時数確保試算の時間数を示し、諸行事の統廃合の検討を行っていることを伝えた。学校便りで「2学期制の必要性」「2学期制の背景や経緯」「本校の教育活動と児童・生徒の実情から」「学校週5日制と学習指導要領との関連」、「Q&A」形式で扱った。2学期制導入の結果は、次のとおりである。

①前年度より授業時数が小学部、中学部で平均50時間増。

②行事等の準備に授業時間を使わず、昼休み、放課後の時間を使うなど、授業時数を確保する意識改革ができた。

(3) 諸検定試験の取り組み

高校入試関係で外部試験は中学部だけで実施していたが、小学部でも4年生以上で日本から取り寄せた学力診断テストを6月に実施し、児童の学習状況を把握した上で日々の学習指導を進めるようにした。メキシコでは、学習塾通いができず、日本書籍を扱う書店もなく、問題集も入手が困難であり、さらに学校以外はすべてスペイン語の世界であるため、学習環境は整っていない。日本から来た保護者の方々は、子どもの学力に関心を強く持ち、学校への期待も多く、その反面、家の外では遊ばず、遊びや行事も多くしてもらいたい気持ちも強くあった。学力に関しては、小学部では日本と同様に問題集等を活用し、自作のテストで診断していたが、もっと客観的なデータを希望する保護者が多くいた。そこで今までは、英検だけを実施していたが、児童英検、漢字検定、算数・数学検定を実施し、市内の他のインター校では真似ができない、日本コース独自の教育活動とした。

(4) 教育交流活動

①交流授業

メキシココースとの交流授業は、日本語教育部の先生方がメキシココースの児童・生徒に週5時間、日本語を教え、生徒にとっては、実際に日本語を使う実践の場である。日本コースではスペイン語を学習しているので、その実践の場面にもなる。児童・生徒の発達段階を十分に考慮して意図的、計画的に実施し、教育的質の高い活動を行っている。年に3回の計画があり、日本文化（七夕、折り紙、カルタ、書道、ゲーム等）を紹介する授業やスポーツ交流授業を実施し、日本文化の理解や相互親睦を深めている。

②交流活動

学院朝会では国の祝日に関わる行事、こどもの日、母の日、七夕、独立記念日、死者の日、革命記念日、クリスマス、お正月、餅つき、節分等に因んで劇、合唱、演奏で発表し、相互理解を深めている。その他に院内ホー

ムステイを行い、お互いに1泊2日の宿泊を受け入れている。児童にとって両国の文化理解、両言語（日本語、スペイン語）を使う実践的な場となる。日本コース独自の週1回の部活動（小4から中2までが対象）を翌年廃部し、代わりに週1回（30分間）であった合同クラブを、週2回（45分）として日課表に位置づけ、両コースの交流活動の場とした。

③合同授業研究とメキシコ人教師による社会科「独立運動」の授業

両コースの算数・数学並びに英語の年間指導計画を交換し、日本語、スペイン語訳を行った。その年間指導計画に基づいて11月には、両コース教師が小学部4年生を対象に分数の合同授業研究を行い、メキシコ人教師も多く参加した。また、6年生が修学旅行のために独立運動の学習を行う時には、メキシココース教師を招いて「独立運動」の授業を受けた。児童2名が通訳を行い、メキシコの独立運動の歴史を学んだ。



④文化祭と運動会の改善

800名以上の規模となる運動会は、部長会等で検討し、小・中学部と高校部で分け、開閉会式と一部種目は合同とした。2つの運動場で実施し、生徒の参加種目を増やすことで、活躍する場面を多くした。文化祭は、メキシココースが消極的だったが、2月上旬に第2回文化祭を計画し、日本コースは学習発表会、メキシココースは自由参加で対応し、主にクラブ発表を行った。翌年は、両コースとも授業日扱いとし、初めて合同文化祭を開催することができた。学院長の解雇に伴い合議制となり、提案が通り、メキシココースの教師の意識に変化がでてきた。

4. 成果

(1) 成果

①学力向上を図る2学期制導入と諸行事の統廃合による授業時数の確保

学力向上を図る取り組み・2学期制導入で諸行事を見直すことで教師の意識に変化が見られ、授業時数の確保や従来通りの提案でなくなり、改善を図る意識が芽生えた。

②教育交流活動の活性化

学院長の解雇以後、理事会の承認により日本コース校長を総校長と改称し、メキシココース総校長と名称が対等となり、両コース総校長、事務局長による合議制で円滑な学院経営が行われるようになった。

教育研究発表も毎年開催され、両コースの教師も意欲的に研究発表会に参加し、生徒間交流だけでなく、教師間交流もより積極的に行われるようになり、授業研究や公開授業の参観をしやすくなった。

③財団 博報児童教育振興会より「特別教育賞」受賞

昨年11月上旬、東京にある日本工業倶楽部において財団博報児童教育振興会より海外日本人学校として初めて「特別教育賞」と副賞100万円を賜った。受賞に当たり、「メキシココースとの日本語による交流活動」「総合的な学習の時間によるユニークな現地理解教育の取り組み」「教師間の教育交流、研究発表会、授業研究の参観、共同研究の推進等」を選考基準としたとの説明が文部科学省および財団博報児童教育振興会よりあった。

5. まとめ

3年間、素晴らしい児童・生徒、職員、保護者、運営委員や理事会の方々に恵まれ、多くの在留邦人、日系人、メキシコ人の方々にご支援を頂きながら日本メキシコ学院に勤務できたことに誇りに思っている。また、日本国内ではとてもできない貴重な体験をすることができた。

在外教育施設派遣にあたり、文部科学省、外務省、海外子女教育財団、財団博報児童教育振興会、県教育局並びに比企地区の諸先生に大変お世話になり心より感謝申し上げます。